

郷土話方資料 (六)

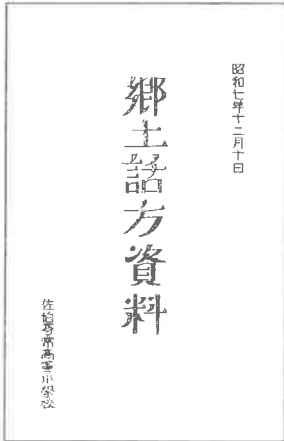
今から七十年前

昭和七年十二月十日

佐伯尋常高等小学校

紹介者 山本 保

(会員 佐伯市池船町)



昭和七年十二月十日

郷土話方資料

佐伯尋常高等小学校

(六) 毛利高標

佐伯の守り神として、去る昭和四年、桜咲く四月、松なつかしい鶴谷城跡に、建てられた、あかがね造りのお

宮こそ、毛利高標公をおまつりした、毛利神社なのです。

高標公は、少い時の名を彦三郎と申しました。

七代目の主様・毛利周防守高丘公の長子ですから、百七十五年前の宝暦五年十一月九日、江戸の藩邸にお生まれになったのです。

そして、安永二年十八才で、鶴城の主様となったのですが、お若い時から、非常にかしこく、又非常に情深い方で、領民を子のようにおかわいがりになりました。

殊に、学問に熱心な事は、大変なものでした。

或年、領内に悪い心をもった占者がゐて、たくさんのお学問のない人民をそ、のかして、悪いたくらみをもくろんだ事がありました。

そばの臣たちは、この悪い人たちを重いばつにしようとなりましたが、高標公は、決してそうした人達を重い罰に、しようとはしませんでした。

それは、人民をおかわいがりになる、お心がそうさせたのでありましょうか。

高標公は、こう考えたのです。

「人民が、悪い心を起すのは、それは決して人民の罪ではない。自分の国の治め方が、悪いからだ。これは

むしろ自分の罪だ。悪い事をしたからと言って、重い罪にしたからとて、国が立派に治まり、悪い心の人がよくなるものではない。人民が悪い心を起こすと言うのも、人民が無智なからだ。

無智なからこそ、悪い奴にすぐそ、のかされるのだ。罰するより先に、先づ、彼等に人の道を教ゆべきだ。それは、学問より外に道はない。

学問だ。学問を盛にすれば、きっと世の中は、平和に治まって行くにちがいない。」

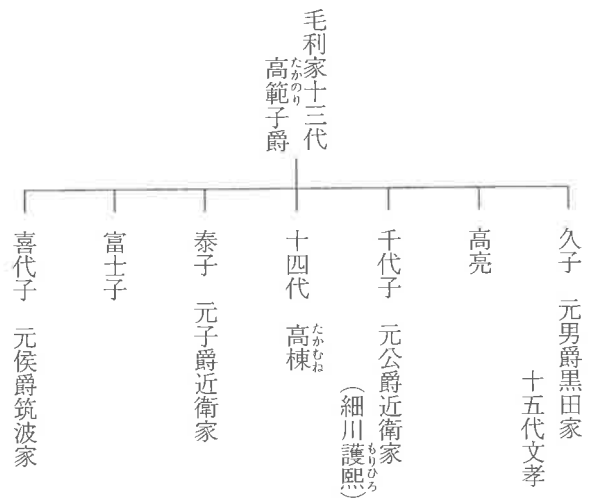
こうお悟りになった高標公は、さっそく四教堂と言う小学校をたてさせ、矢野黙齋、山本七兵衛の二人を先生として、たくさんの人達を集めて、勉強させ、高標公御自身も、折々とお出になって講議をなされたそうです。

こうして、率先して、学問を奨励したため、それから、非常に学問も盛になりました。

それで、国は立派に治まり、享和元年八月二日、四十才でお亡くなりになるまで、長い間、悪い事をして、罰せられたものが、わずかに、三人しかなかったと言うことです。

(※旧かなづかいは原文のまま)

高範子女・本家侯爵



(山本保先生資料 次ページ参考のために)